◆ キーワード　八百比丘尼伝説／若狭小浜／江戸時代／空印寺／小浜藩

八百比丘尼伝説の成立について
―江戸初期の若狭小浜を中心に―

冨　樫　晃

はじめに

八百比丘尼伝説は、現在、北は岩手県から南は佐賀県まで百六十四事例を収集した中で、伝承の濃密な地域として、群馬、埼玉などの北関東地域、新潟、富山、石川、福井などの北陸地域、岐阜、愛知といった中部地域、鳥取、島根の山陰地域があげられる。

これら地域の伝承の中で、八百比丘尼の出生、または終焉の地が、若狭小浜であるという事例か多く見受けられる。こうしたことから、八百比丘尼伝説の成立と伝播をめぐって、いくつかの先行研究が若狭小浜との関係性について論じられており、若狭小浜という地が、この伝説の重要な要素となっているという点において注目する必要がある。

そこで、この八百比丘尼伝説の百六十四事例から、若狭小浜との関係にふれられているものについて、ピックアップしてみると、四十六事例が確認された。（表1．八百比丘尼伝説全国一覧表参照）

また、この若狭小浜との関係性を示す事例の内、八百比丘尼の死没地として、若狭小浜「空印寺」という特定の寺院である事例が四事例あった。そこで、本稿では若狭小浜と八百比丘尼伝説がなぜ結びつくようになったのか、その関係性について、「空印寺」を中心として論じていく。

1．文献資料に見る若狭小浜の八百比丘尼伝説

それでは、文献資料により、若狭小浜はどのように取り上げられていたのかを、時代を追って見てきたい。（表2．八百比丘尼伝説文献年表参照）

これら年代毎の若狭小浜に関する文献資料のうち、№1～3については、一四〇〇年代半ば、室町時代の資料であるが、すでにこの時期、長寿を語る比丘尼を中心とした集団が、若狭の国を拠点としていることがわかり、これが若狭の国と八百比丘尼伝説を結びつける基となったといえる。

根井浄は、この文献から、「このように八百比丘尼を初め、多くの廻国比丘尼とその集団が京都界隈にみられるのは、それぞ

れ所属した本寺本社の勧進活動であったことは想像に難くない。いうまでもなく、こうした勧進活動には、たとえば、盛善という百六十歳の鞍馬寺の勧進聖が居たように、高齢を名乗り、その奇瑞を演じることが一層効果的であったことを示している。」と述べている。各日記の記述からは、長寿の比丘尼をいわば見せ物として見料を取っていることから、根井のいう若狭の社寺に関わる比丘尼の勧進活動の一環であることは明かであろう。

№4の林羅山『本朝神社考』は、室町の日記類から約百五十年時代が下っているが、室町時代の文献にはなかった比丘尼が長寿となった理由が述べられており、この頃からストーリ性を持った伝説として語られていたことがわかる。

№4から6にかけての年代では、『若狭国伝記』で「死所不詳」となっているなど、死没地がはっきりとしておらず、死没地が若狭小浜の「空印寺」岩屋とされたのは『向若録』、『若狭郡県志』に記載される一六九〇年頃と考えられる。また、『若狭国守護代記』にあるとおり、青井白玉椿の「神明宮」でも、八百比丘尼が祭られており、八百比丘尼の住居も昔ここにあったとされている。

それでは、これら文献資料に見える、若狭小浜の八百比丘尼伝説に深く関わる寺社である「空印寺」と「神明宮」について、八百比丘尼伝説との関係性からみていきたい。

2. 若狭小浜八百比丘尼伝説と「空印寺」、「神明宮」の関係性

(1) 空印寺の概要と八百比丘尼略縁起について

八百比丘尼の最期の地とされる「空印寺」については、大正十一年『若狭遠敷郡誌』に「曹洞宗三河龍海院末にして同町男山に在り、本尊は釈迦如来なり、寛永十一年駿河田中、後武州河越源昌寺嶺國久松自坊の開山三河龍海院七代年洲存甫の碑を移して開山とす、初め健康寺と号す、寛文二年（一六六二）忠勝公遠行に付寺号を改む、二十世道秀を中興とし面山の在るや其名声高し、藩主酒井家代々の菩提所にして忠利公以下の墓所あり」との記載があり、寛永十一年（一六三四）年の開山とされている。

この空印寺は小浜藩主酒井家の菩提寺で、孝心の篤かった二代藩主忠直が、父忠勝（号　空印）の七回忌法要を寛文八年（一六八八）に執り行うに当り、在来の堂舎では手狭なため、菩提所にふさわしい壮麗な伽藍を造営したという記録がある。

空印寺と八百比丘尼伝説との関わりを示すものとして、八百比丘尼が入定したとされる岩窟（岩屋）がある。『拾椎雑話』で「空印寺岩屋を八百比丘尼の死没地（墓）としたのは、寛文年中、すなわち、二代目藩主忠直が先代の号「空印」を基に寺号を「空印寺」と改名し、七回忌を行う為に、壮大な伽藍を建立した頃と重なっている。

また、成立年代は不詳（書物として現存するものは明治四十二年発行）であるが、「八百比丘尼略縁起」として表2、№14のように伝えられている。

（2）神明宮の概要と八百比丘尼縁起

「空印寺」建立以前に八百比丘尼を祭っていたとされる青井白玉椿「神明宮」の概要と「空印寺」との関係についてもみていきたい。

この神明宮の創建は、雄略天皇二一年（四七七）や建保（一二一三～一二一八）とする複数の社伝があるが、明確となるのは九州豪族の菊池氏が宮司となった一四〇〇年頃からである。

神明宮のある白玉椿は、熊野山系と呼ばれ、神明宮が鎮座する谷は「熊野谷」と呼ばれている。その語源は、『郡県志』の中で「後瀬の連峰にして西南に在り、山腹に伊勢内外の神を祭る。また熊野十二所権現の社あり、その形は一箇の社で横長に造り、左右それぞれ六所を祭り、その中間に役小角の像を安置す。或いは役行者という。大和国葛城の里民なり、壮にして家を棄て葛城山に入るという。相伝う。大宝二年九月七日、小角五色の雲に乗りてこの山に来る。事後この像を刻んで安んずと、今の山伏は小角の末徒なるが故に、国中の山伏これを尊崇す。凡そ国中の山伏五六十人あり、このうち金襴地法印五人あり、都院号の者二十七人これあり」と記載されているとおり、熊野十二所権現社があり、そこに集う熊野山伏達がいたことからついたものと思われる。『稚狭考』にも「山伏は、寛永年中四十二人、天和年中二十六人あり、当時にては十四五人あり」との記述がある

この青井の神明宮は、№10『拾椎雑話』「寺社」の項にあるとおり、元文五年（一七四〇）新たに八百比丘尼伝説を取り入れて、縁起を作成したことがわかる。

この縁起は宝暦三年（一七五三）三月廿二日　若州小浜神明宮主　菊池肥後守橘朝臣「八百比丘尼縁起」として、埼玉県さいたま市大宮の慈眼寺に現存している。（表2．№11参照）

（3）空印寺と神明宮それぞれの縁起内容について

空印寺と神明宮それぞれの縁起ついては、以下のような分析ができる。

①空印寺略縁起

・出生については、勢村高橋長者の娘とする伝承を採用している。

・『中原康富記』、『臥雲日件録』等、室町期の日記類の記述を利用しながら、日記類には書かれていない京都での比丘尼の滞在場所が明らかにされている。

・京都から若狭に帰国した際の住居を神明宮としている。

・八百比丘尼の死没地を、境内内の岩窟であると明言している。

②神明宮縁起

・出生については、父親が泰道満とする伝承と共に、いくつかの異なる伝承をとりまとめているが、出生地は若狭とする。

・神主である菊池氏には、縁起とは異なる家伝があること。

・神明宮内に長期間居住していたと主張している。

・死没地を「何国に死去といふ事をしらず。」としながらも、異伝として空印寺の岩窟にもふれていること。

これらの八百比丘尼縁起を対比すると、それぞれ八百比丘尼の出生等に関し、異なる伝承を基にしているが、空印寺の縁起が、八百比丘尼の若狭での住まいを「神明」とし、神明社の縁起では、死没地を空印寺とする説を取り上げているなどお互いに気を遣った縁起となっており、空印寺と神明社は当時密接な関係性を持っていたといえよう。

これらの縁起作成は、それ以前の伝承や文献等で生誕地や死没地が明らかにされていなかった八百比丘尼の生誕地と死没地を、若狭小浜に特定することが、目的の一つであったと考えられる。『稚狭考』、『旅日記』に記載されている新旧の木像も、神明宮に現存している。（写真1、2）

室町時代（享禄二年　一五二九）に製作された八百比丘尼の木像は、この時代、神明宮において、長寿の比丘尼の信仰を持ち伝えられていたことを示している。

元文五年に新たに造られた木像は、小浜藩主である酒井家の家紋が入れられている。元禄八年八月十八日付「菊池治部大夫神明宮社殿修復ノ次第ニ付書上控」には、「一神明御両社末社不残古来御國主様御代々御修復被為成被下候御事、」と神明宮の修復を藩主が行う等、手厚い扱いをされていた記録があり、藩主の威光による神明社の格式を示している。

写真１．八百比丘尼像（神明神社所蔵、室町時代）福井県立若狭歴史博物館ホームページより

写真２．八百比丘尼像（神明神社所蔵、江戸時代）福井県立若狭歴史博物館ホームページより

３．空印寺及び神明宮による八百比丘尼縁起の作成理由

空印寺及び神明宮が、八百比丘尼伝説を利用した施設等の整備と、八百比丘尼縁起の新たな作成等を一六〇〇年代後半から一七〇〇年代中盤にかけて行われた理由を考察してみたい。

まず、空印寺の『八百比丘尼略縁起』を見ていくと、空印寺に参詣すれば、八百比丘尼の霊験により、病気の治癒や幸福増進といった御利益があるということが強調されている。まさにこの縁起が作成された目的が明らかになってくる。

一方の神明社『八百比丘尼縁起』は、酒井家の紋が付いた木像と縁起を新たに作成し、宝暦九年に京都で開帳した目的は、勧進であると思われる。空印寺、神明宮が共に勧進等、収入を目的とした縁起創作を同時期に行った理由は何であろうか。空印寺は、小浜藩主の菩提寺であり、神明宮は、藩主の手厚い保護を受けている。すなわち、藩主の威光があるからには、それなりの格式を保たなければならないはずである。酒井家が小浜藩主として着任した当初、寺域の拡張等について小浜藩から多大なる支援

を受けてきたことについては、既に述べたが、時代が下ると共に小浜藩の財政が厳しい状況となってきている。

『福井県史』によると、「小浜藩の財政が窮乏の様相をみせ始めるのは、二代藩主忠直の時期であるが（『御自分日記』）、その後も小浜藩の借財は減少することなく、寛政七年には二四万両と噂され（清常孫兵衛家文書）、文政十一年には三〇余万両とも四〇万両ともいわれる額となっている（熊川区有文書、古河家文書）。本格化するのは七代忠用の頃からで、八代の忠貫の明和七年（一七七〇）には借財が一一万両に達し、「御家御潰レニ被及候御危急之御時節」と言われるまでの事態にいたっていた（鈴木重威家文書）」と小浜藩の財政は一七〇〇年代中盤以降火の車であったことがわかる。

こうしたことから、藩主との関わりを持つ寺社の格式を保つ為には、それなりの財源が必要であるが、藩財政の悪化により、藩の支援が望めなくなったことから、自らの資金源を得る為に勧進活動の必要性に迫られたことが、八百比丘尼伝説を利用した縁起の作成に繋がっていると考えられる。こうした緊急性のある理由によって、縁起が急ぎまとめられた結果、小浜近隣の複数の伝承等を取り上げるといった、縁起のストーリーとして一貫性の無いものとなったのではないだろうか。

4. 小浜関連の八百比丘尼伝説伝承地域と勧進活動

表1. の各地の伝承を地図に落としたものが、図1. 八百比丘尼伝承地と小浜からの伝承経路である。

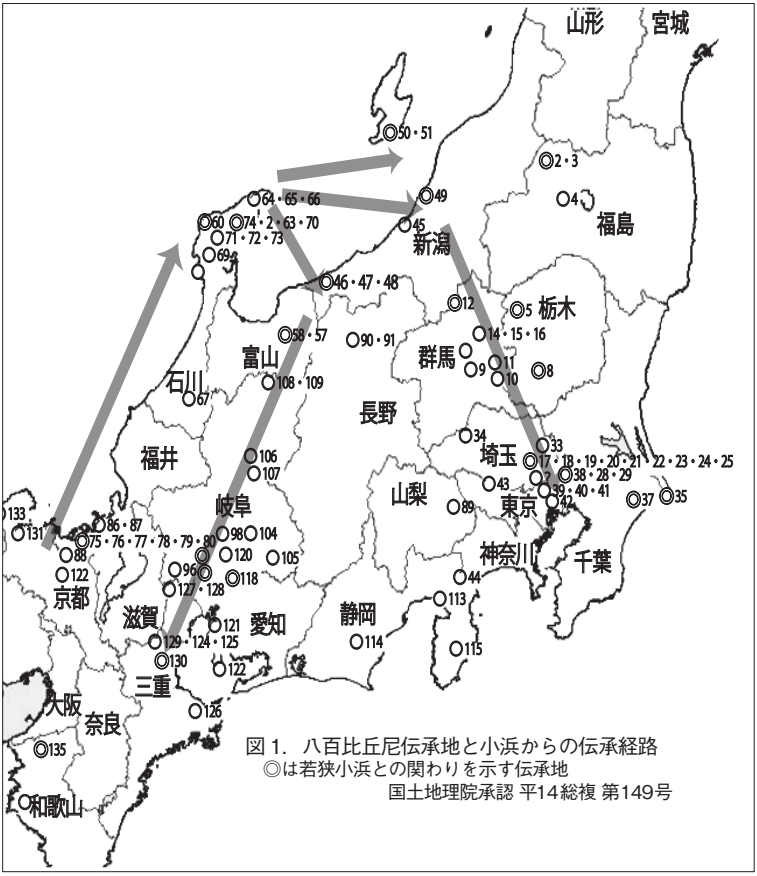

図1. 八百比丘尼伝承地と小浜からの伝承経路
◎は若狭小浜との関わりを示す伝承地
国土地理院承認 平14総複 第149号

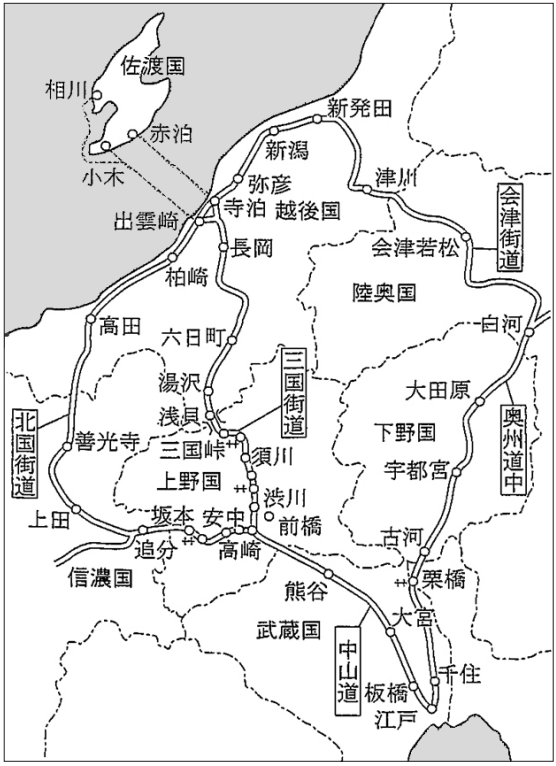

図２　佐渡路の道筋（『群馬県史』通史編５より）

た佐渡路の中で、中山道の高崎宿から北上して三国峠を越え、越後長岡を経て寺泊へ到る三国街道と宇都宮からから会津若松を経る「会津街道」の道筋と一致する。（図2）

また、中部地域については、糸魚川から黒部を経て、高山から岐阜県内の街道筋（下呂、郡上八幡）を名古屋、伊勢までのルートと一致する。（図3）

このうち、三国街道の関所である猿ヶ京関所は、入鉄砲出女として、関所を通る女性のチェックが厳しかったが、安政二年五月猿ヶ京関所明細帳には、通行の女性の分類が記載されており、そこには、禅尼、尼など共に別途比丘尼として分類されている。その内容は、「是ハ伊勢上人・善光寺上人なとの弟子、又ハよき人の召仕、其外熊野比丘尼等也」とされ、熊野比丘尼がこの関所を通行していたことがわかる。

また、名古屋を経由し、伊勢に向かうルートについては、三重県内の伝承（表1．事例No.125、127、128、130参照）にあるとおり、伊勢神宮や熊野への参拝として若狭から比丘尼が来ていたことを示している。

ここから考えられることは、この伝説の伝播者と考えられる若狭小浜の宗教者が、江戸から寺泊を経て、海上で能登から若狭小浜までを結ぶ佐渡路、会津街道を利用するルートと、熊野・伊勢から名古屋、岐阜、飛騨、富山を経て、糸魚川から海上で

これを見ると伝承地域が関東周辺地域と中部地域に偏在していることがわかる。この地図中、◎の印が若狭小浜と関係づけられている伝承地を示すものである。この若狭小浜と関連づけられる伝承地の点を結んでいくと、小浜から能登への線、能登から寺泊を経て群馬県、栃木県、埼玉県から東京（江戸）へと結ぶ線、糸魚川から黒部、飛騨高山、岐阜、愛知を経て伊勢に至る線と三つのラインが出来る。

このラインに基づき、江戸時代の街道を当てはめてみると、寺泊から江戸を結ぶラインは、五街道の次に重要な道筋とされ

能登から若狭小浜までを結ぶ伊勢路・郡上街道等を利用するルートの二つの連絡ルートが出来ていた事が推察される。

この二つのルート形成の理由としては、以下のように考えられる。

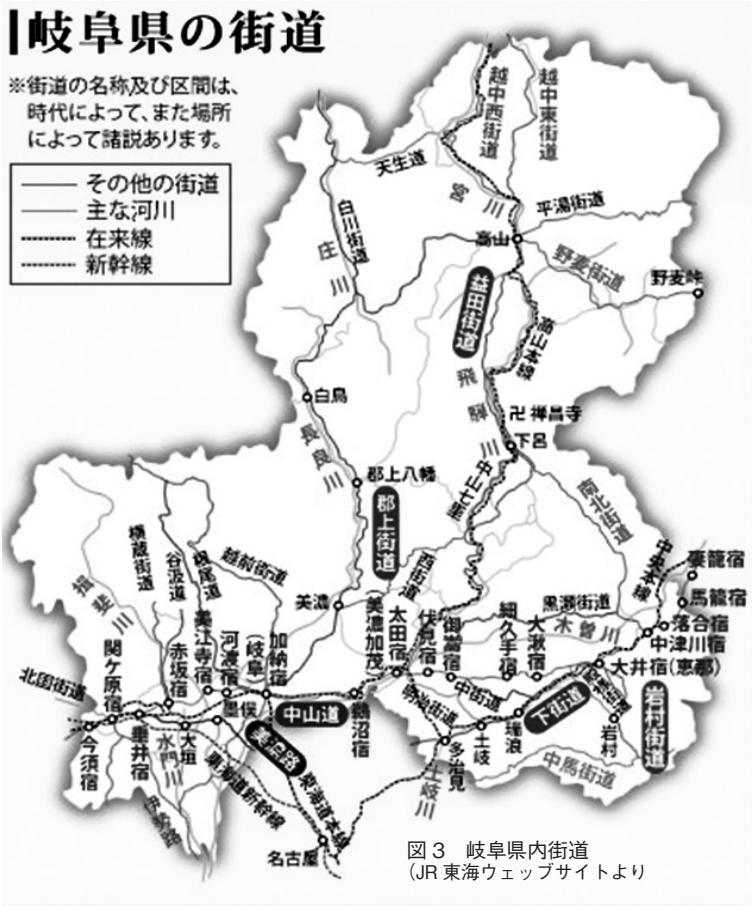

図３　岐阜県内街道
（JR 東海ウェッブサイトより

①当時国内最大の都市であり、消費地であった江戸とその周辺地域において、勧進活動を行っていたために、小浜から江戸までのルートを作る必要性があった。小浜から江戸までは、東海道の陸路を経由するよりも海上ルートが、より最短ルートだった。また、若狭小浜から女性が陸路出国するには、小浜から近江今津に到る九里半街道にあった熊川番所の存在があり、非常に困難を伴ったため、海路に頼った。熊川番所は、貝原益軒『己巳紀行』に「女をとどむる関所あり」と記され、『稚狭考』明和四年（一七六七）にも「本国（若狭小浜）に女の旅行を制禁あり本国は出るを禁じて入を禁じられず」とあり、女性の出国は非常な困難を伴っていたようであり、近江の国からの陸路ルートは実質不可であった。

②小浜から伊勢へのルートについては、宗教者として、立山、伊勢、熊野等の聖地巡礼を行うためのルートであり、また大都市である名古屋周辺地域への勧進活動も同時に行ったと考えられる。

以上から、八百比丘尼伝説が若狭小浜から発信され、この二つのルートを使って、関東地域、中部地域に伝播されたと考え得るのである。

根井浄「廻国の比丘尼」では、八百比丘尼伝説の伝播者と思われる廻国比丘尼について、「八百比丘尼伝説にみられる人魚の肉は、その説話を語る廻国比丘尼が本所とする寺社の霊験薬として宣伝したことが推測される。それは、医療と結ぶことが勧進活動として最上の手段であったとみられるからである。また長寿を得る人魚の肉が、一説には九穴の鮑（貝）であったというのは、その鮑そのものに長寿を得る霊薬としての信仰があったからに他ならない。したがつて、人魚の肉という霊物は、八百比丘尼伝説の核をなすもので、一種の霊験薬として唱導の中に活用されたことは疑いないであろう」との見解を示しており、移動ルートの拠点化作りにおいて、人魚伝説が利用されたことへの理由付けとして、検討の価値があると思われる。

5．八百比丘尼縁起の全国展開と現地伝説との融合による伝説化

財政上の問題から発生した空印寺、神明宮の勧進活動は、空印寺や神明宮に集う山伏や比丘尼達による八百比丘尼縁起を利用した全国展開において、勧進宿としての各地の拠点に縁起のストーリーを基として、現地の伝説と融合した地域性を持つ八百比丘尼伝説を生み出した発端となったと考えられる。

一例をあげると、

（1）新潟県長岡市寺泊大野積

高津（金五郎）家（表1．№49参照）は、八百比丘尼の生家であるとする伝承がある。この伝承は、現地の信仰対象となっている弥彦の神の伝説と融合したストーリーとなっている。この高津家は大野積集落の草分け的存在で、最初に居住した七軒のうちの一軒とされる。現在民宿業を営んでいる同家には空印寺と関係する「八百比丘尼の入定御影」や九穴の貝といった遺物が残されている。

この家では、八百比丘尼の遺物が現存している。なかでも九穴の貝といわれるオウムガイが残されており、最近まで長寿を願い、酒を入れて飲んでいたとのこと。（写真3）

また、空印寺からの書も残されている。（写真4）

高津家は、空印寺から来た比丘尼の拠点であり、八百比丘尼生家は空印寺の公認だったと思われる。

写真3．新潟県長岡市寺泊大野積
高津家（金五郎）所有オウムガイ
（筆者撮影）

（2）群馬県みなかみ市

利根郡小川にある鈴木（清治）家（表1．№12参照）は、

写真４．新潟県長岡市寺泊大野積高津家（金五郎）所有寺泊町史より

以下の『利根郡誌』の記述によると、八百比丘尼の生家として、子孫を名乗っている。

「今小川村に八百比丘尼の屋鋪あり、松樹茂す、其中巨大なる一樹神木と称する者七抱に余る。其樹下に石の小祠あり。八百比丘尼出生の地元文五年庚申三月吉日の十九字を彫るのみ。村の鈴木氏其子孫なりとて、右の地所を所持す[5]」。また、子孫と思われる鈴木倉蔵が、嘉永五年（一八五二）に空印寺境内に碑を建てており、そこには小川の農民清治の女（娘）が八百比丘尼である旨が書かれており、この家をめぐる伝説のストーリーも利根川の淵の地名にまつわるものであり、現地の伝承と融合している。

（3）新潟県佐渡羽茂大石
藤井（田屋）家（表1．№50参照）も同様に八百比丘尼の生家とされる田屋家は、大石集落の草分けである。『佐渡國史』には、若狭彦神社宮司談も収録されており、それによると若狭にも八百比丘尼が佐渡の人であるとの伝えがあるとしている。

この田屋家は、大石集落の草分け的存在であり、井尻にある「熊野神社」の永久氏子総代や「元禄検地帳」に記載がある「瑠璃薬師堂」の管理者など、この地域の宗教的行事を取り仕切る家として、非常に重要な立場にある。

なお、八百比丘尼の遺物も近年まで残っていたが、火事で失われたとのこと。

熊野神社には、鎌倉時代末期元享二年（一三二二）の年号が入った古い棟札に、熊野神社の殿内として、藤井田屋家と見られる人物の記載がある。この熊野神社は、八百比丘尼の開基とされ、神社由来の聞き書きとして、明治三十四年に『熊野神社旧記取調書』「当社合殿傳説」として、熊野神社神主　藤井甚太郎（田屋）と同社鍵取　岡崎与十郎連名で報告されている。その内容には、八百比丘尼伝説に関わるものとして、以下の記載がある。

一　比丘尼妙道ハ何国之産、何年間之生年共不知、往年藤井甚太郎ニ仮住居諸国ヲ遍暦シ、佐渡江帰住之時甚太郎六代之孫ニ対面スト傳説アリ。此故ニ、是ヲ郷里之人今ニ八百比丘ト唱フ。

この記録から見ると、熊野神社創建当初に田屋家を仮住まいとしていた比丘尼が旅立ち、当主が六代目の時に、生家に再び帰ってきたという伝承であり、当主六代目とすると数百年の時を経ていることになる。中世期に各地で熊野神社の建立に関わった熊野比丘尼の活動が一度絶え、数百年後に改めて比丘尼の活動が再度活発化してきたことが、伝承として残っており、活発化の時期が、若狭空印寺が勧進活動を始めた江戸初期と重なっていると考えられる。また、この田屋家の伝承には、「比丘尼妙道八何国之産、何年間之生年共不知」のように、空印寺が関与する以前の伝承と思われるものが含まれており、空印寺関与以前の八百比丘尼伝承の姿を垣間見ることが出来よう。

上記、八百比丘尼の生家とされる特定の家三つのケースに共通することは、以下の点である。

①それぞれ集落の草分け的存在や有力者の家筋であること。

②八百比丘尼の生家であるということが、空印寺の公認である。

③若狭小浜から来た女性宗教者の拠点となっている。

空印寺がその縁起において、生誕地が若狭であるとしながらも、複数地域の異なる家に、それぞれ八百比丘尼の生家であるとするお墨付きを与えている理由は、各地に設けた勧進宿としての拠点である地域の有力な家を権威づける目的のため、自らの縁起を無視しつつ、公認の基に八百比丘尼の生家として伝説を付加させてきたのではないかと考えられる。こうして、全国各地で八百比丘尼の生家として空印寺に公認された拠点を通じて、その地域の伝承等を包含した八百比丘尼伝説が地域に定着していったのではないだろうか。

6. まとめ

以上、若狭小浜と八百比丘尼伝説の関連について、主に空印寺と神明宮を中心として考察した結果について、以下のようにまとめることが出来よう。

①既に一四〇〇年代半ばから、若狭の国に長寿とされる比丘尼を中心とした勧進集団があった。神明宮には、室町時代に製作された八百比丘尼木像が現存しており、こうした長寿とされる比丘尼を中心とした勧進集団と神明宮とが関わっていたと考えられる。

②若狭小浜の「空印寺」及び「神明宮」は、小浜藩主との特別の関係を有し、その藩主の威光に基づく寺社格式の保持が必要であった。しかしそれまで藩に支えられていた増築や改修等が、小浜藩の財政逼迫により困難となった。そのため、格式保持の勧進活動を目的として八百比丘尼伝説を利用し、伝説の遺構整備や新たな縁起を一六〇〇年代後半

から一七〇〇年代半ばに作成した。

③この時に作られた縁起を基としての勧進活動は、当時最大の都市であった江戸に向かうルートと、巡礼ルートである熊野・伊勢を中心としており、それが若狭に関わる八百比丘尼伝説の伝播となり、伝承地域が形成された。

④勧進ルート上にある全国各地の有力な家筋を勧進の拠点とするため、空印寺公認による八百比丘尼生家の伝承が付加された。これにより、有力な家筋である地元有力者の権威付けを行った。

⑤この地元有力者への伝説付加の過程で、地元の伝承を八百比丘尼伝説に織り込み、地域の特色を持った八百比丘尼伝説が、その地域に定着することとなった。

こうした理由により、若狭小浜から発信された八比丘尼伝説が全国的に伝播していったと考えられよう。

参考文献

大島建彦「「八百比丘尼」の伝説」、「伝説「八百比丘尼」資料一覧」初出『八潮市研究　第十一号』一九九二『日本の昔話と伝説』二〇〇四　三弥井書店

小浜市史編纂委員会『小浜市史』社寺文書編　一九七六　小浜市

小浜市史編纂委員会『小浜市史』通史編上巻　二〇〇四　小浜市

寺泊町『寺泊町史』資料編4　一九八八　寺泊町

中塩清之助『福井県郷土史民間伝承編』一九三九　福井市立実科高等女学校

中前正志「会津金川寺所蔵八百比丘尼伝説関係資料類―縁起に成り上がった俗説―」『日本宗教文化史研究』第9巻第2号　二〇〇五　日本宗教文化史学会

新治村村誌編さん委員会編『新治村誌　通史編』二〇〇九　みなかみ町

根井浄「廻国の比丘尼」『仏教民俗学大系』2聖と民衆　一九八六　名著出版

野村純一「椿は何故「春の木」か―「八百比丘尼」と「常陸坊海尊」」『日本伝説大系別巻1研究編』一九八九　みずうみ書房

羽茂町史編さん委員会編「通史編近世の羽茂」『羽茂町史第三巻』一九九三　羽茂町

福井県庁『福井県史』通史編3　一九九六　福井県

藤江久志「八百比丘尼伝説の成立と変容―福井県小浜市を中心に―」『久里』24号　二〇〇九　神戸女子民俗学会

松本孝三「八百比丘尼」『民間説話＜伝承＞の研究』二〇〇七　三弥井書店

三国正一「隠された神の布石　後瀬山と熊野山系」『小浜市史紀要第8号』一九九四　小浜市教育委員会

（とがし・あきら／昔話伝説研究会）

表１　八百比丘尼伝説全国一覧表

番号	伝承地	伝承内容	若狭小浜関係	資料
1	岩手県奥州市江刺区米里	米里村中沢日影屋敷に生まれた女が、八代の夫に嫁いだが、最後の夫の出身地若狭に行き八百年生きた為に、若狭の国名はこの女から起こった言われている。	◎	江刺郡昔話
2	福島県喜多方市新宮　新宮神社	八百比丘尼が比丘尼平に住んでおり、茶の木を植えた。		巫女と仏教史
3	福島県喜多方市塩川町金川金川寺	昔、若狭小浜より老比丘尼が来て、金川寺を建立した。阿弥陀を自ら彫り、本尊とし、八百歳まで生きた。それ八百比丘尼といった。 俗説によれば、八百比丘尼は泰勝道の娘であり、会津山麓にて養老二年生まれ。勝道が庚申講を行った際に、鶴淵野底より龍神が出て人々をもてなして、九穴の貝を出したところ、誰も食べず、勝道が持ち帰ったところ、娘が食べたために長寿を得た。	◎	新編会津風土記
4	福島県会津若松市河東町堂島	八百比丘尼は、会津山麓生まれ。九穴の貝食べたために長寿を得た。金川寺を建立した。		河東村民俗知識通過儀礼口頭伝承
5	栃木県日光市　日光山	八百比丘尼が植樹したのが二本杉である。		俚言集覧
6	栃木県鹿沼市	若狭の八百比丘尼の生まれは鹿沼である。	◎	拾椎雑話
7	栃木県鹿沼市中柏尾	八百比丘尼が杉を植樹した。それが今の大杉である。		柏尾の民俗
8	栃木県上都賀郡西方町真名子	愛子村里地寺縁起によると八百比丘尼は崇神天皇五十九年に旭の長者の家に生まれた。父が庚申講で持ち帰った貝肉を食べ八百年生きた。八百美久という。天平宝字年間に若狭小浜で死去と伝わる。	◎	若狭国志伴信友書入
9	群馬県前橋市下増田町	八百比丘尼が住んでいたところが、比丘尼台と呼ばれている。		勢多郡誌　群馬県資料二七
10	群馬県桐生市黒保根町上田沢	八百比丘尼が死没した場所は経塚と呼ばれている。		ふるさと一九六六年
11	群馬県みどり市東町草木武尊神社	八百比丘尼が杉を植樹した。		勢多郡東村の民俗
12	群馬県利根郡みなかみ町小川	庚申講で竜宮の人魚をご馳走を出され誰も食べず、持ち帰った清治の娘おみよがこれを食べ、長寿となったことから、八百比丘尼と呼ばれることとなった。周辺の目立った木も八百比丘尼が植えたものとされる。	◎	利根郡誌
13	群馬県利根郡昭和村瀧寺	八百比丘尼が欅を植樹した。		上野の伝説
14	群馬県沼田市利根町大揚	八百比丘尼が植樹したのが逆さ銀杏と呼ばれている。		上州路伝説編
15	群馬県沼田市白沢町高平	八百比丘尼が植樹したものが片葉桜と呼ばれている。		上州路伝説編
16	群馬県沼田市白沢町上古語父	八百比丘尼が植樹したものが一本松と呼ばれている。		白沢村の民俗
17	埼玉県さいたま市桜区大久保領家　山王社	八百比丘尼が植樹したものが大欅と呼ばれている。いつまでも枯れないのは八百比丘尼が植えたため。		埼玉県伝説集成
18	埼玉県さいたま市緑区大牧多宝寺	八百比丘尼が多宝寺に居住していた。		浦和市史民俗編
19	埼玉県さいたま市西区水判土　慈眼寺	地蔵堂の黄金仏は八百比丘尼の守護仏で、寿地蔵という。一時期紛失したが、享保年間土中より発見され、その石櫃に八百比丘尼大化元年と記されていた。また榎を植樹した。	◎	新編武蔵国風土記稿 諸国里人談
20	埼玉県さいたま市大宮区宮町　八百姫大明神	八百比丘尼（八百姫大明神）が居住した。		大宮市史第五巻
21	埼玉県さいたま市大宮区桜木町	中小村田の坂間家所蔵の二斗ばりの臼は、八百姫手植えの松を切って作った。		大宮市史第五巻
22	埼玉県さいたま市北区植竹町　八百姫大明神	昔、八百比丘尼が植えたビャクニンマツと称する松があった。		大宮市史第五巻
23	埼玉県さいたま市北区櫛引町　観音堂	二つの塚が八百比丘尼の遺跡として伝わる。槻の大木二株も八百比丘尼が植えたとされる。		新編武蔵国風土記稿 大宮市史第五巻
24	埼玉県さいたま市見沼区染谷	安養寺は、八百比丘尼安養の場所。		大宮市史第五巻
25	埼玉県さいたま市岩槻区黒谷	昔、黒谷は海で、若狭生まれの漁師が娘に人魚を食べさせたため、娘は八百歳まで長生きした。住んでいた所には、八百比丘尼の杖が根付いた椿があり、現在住んでいる家の屋号は「玉椿」という。八百年生きた比丘尼が食べた貝殻がつもったものが貝塚と言われる。	◎	埼玉の伝説 岩槻市史民俗史料編
26	埼玉県川口市峰　八幡社	八幡社境内の銀杏の古木は、ここを参詣した八百比丘尼の杖が根付いたとされる。		新編武蔵国風土記稿
27	埼玉県川口市東貝塚	八百比丘尼は貝塚村の生まれという。八百比丘尼が船を繋いだ船繋松がある。		新編武蔵国風土記稿
28	埼玉県川口市前野宿　比丘尼堂	比丘尼堂に八百比丘尼が住んでいた。		埼玉県伝説集成
29	埼玉県川口市鳩ヶ谷本町	比丘尼町に八百比丘尼が住んでいた。		さへづり草
30	埼玉県東松山市正代　東崎観音堂	若狭より八百比丘尼が来て、東崎観音に来て、自分の生涯の中で、昔泥海を船に乗って東崎観音まで来たことが一番愉快だったと語った。		川越地方郷土研究四
31	埼玉県蕨市錦町	東光寺に八百比丘尼が住んでいた。椿を植樹した。		埼玉県伝説集成

32	埼玉県八潮市中馬場	上総から魚の行商に来ている老人の招きで名主と村人で老人宅を行くと、人魚がご馳走として出てくる。名主が持ち帰った人魚を孫娘が食べ、長寿となるが、尼となって若狭に行き、八百歳まで生きる。山王塚に比丘尼の安永八年の墓石があるが、八百比丘尼を供養したもの。	◎	八潮の民俗資料一
33	埼玉県南埼玉郡宮代町百聞	来訪地が八百比丘尼堂と呼ばれる。		郷土研究資料二
34	埼玉県秩父郡皆野町大淵	八百比丘尼は、この村の生まれで産湯を汲んだところが亜龍井と呼ばれる。山中の岩洞に居住し、この地で没し、塚が残る。父親が仙人にもらった人間の肉を娘が食べ、八百年たっても死なないため生きたまま埋めてもらつた。		秩父誌 埼玉県史民俗資料報告書
35	千葉県銚子市猿田　猿田神社	若狭の八百比丘尼は高橋長者の娘で、長者が遠い異境からもらった不老長寿の肉を食べたため、百二十歳で尼となり、八百歳で自ら入定した。その墓標が比丘杉であるが、明治三十七年に刈られた。	◎	房総の伝説
36	千葉県松戸市上本郷	六軒新田の六人が上本郷の長者屋敷の庚申講に呼ばれ、人魚の肉をもらったが、一人持ち帰った者の娘がこれを食べ八百年も長生きする。比丘尼となって若狭に住んだ。千駄堀の人が旅に出たときに、この比丘尼に会った。	◎	松戸の歴史案内
37	千葉県八日市場市小泉	昔、八百姫という娘がいて、その父が日頃信仰している龍神から竜宮城に招かれ、人魚の肉をもらい、庚申講で村人と食べる。庚申講で肉を食べると龍神の祟りで村が死に絶えると言われていたので、八百姫は龍神に詫びて尼になる。後に若狭の国に行き、八百比丘尼となる。	◎	房総の伝説
38	千葉県流山市三輪山	八百比丘尼の出生は六左衛門屋敷で、産湯を汲んだ水は八百比丘尼水と呼ばれる。		千葉県東葛飾郡誌
39	東京都北区赤羽北　阿弥陀堂	行基作の阿弥陀は若狭八百比丘尼の看板仏と伝えられる。比丘尼の植えた古い松があった。		新編武蔵国風土記稿 北区史
40	東京都北区昭和町	八百姫塚があった。		遊歴雑記 北区史 新修荒川区史
41	東京都北区上中里	上中里村に庚申の碑があり、もっとも古いものは八百比丘尼が建てたという。低地の貝塚のある一帯を八百比丘尼の屋敷と呼んでいた。		遊歴雑記 さへづり草 北区史
42	東京都荒川区西日暮里　浄光寺	浄光寺には八百比丘尼が与えたという千手観音がある。		新修荒川区史
43	東京都青梅市塩船　塩船寺	永仁四年に八百比丘尼が立てたという古碑がある。		新編相模国風土記稿
44	神奈川県足柄下郡箱根町	元賽ノ河原に八百比丘尼の墓といわれる石塔がある。		新編相模国風土記稿
45	新潟県柏崎市十字町	石仏が八百比丘尼が作ったものと伝えられている。		笈埃随筆
46	新潟県糸魚川市谷根	下早川村中谷根に女中をしている娘がいて、竜宮に招かれた主人の持ち帰った人魚の肉を食べ長寿となる。比丘尼になって諸国を巡り、若狭にて八百歳で死ぬ。	◎	西頸城郡の伝説
47	新潟県糸魚川市須沢	磯野源左衛門が親戚の婚礼でもらった魚を妻が食べ、八百年も長生きした。比丘尼になって墓の中で鉦を叩きながら死んだ。その後、その場所が窪んだ穴が出来、村の名前が八窪となった。		西頸城郡の伝説
48	新潟県糸魚川市鬼伏	二本松の根本に八百比丘尼の足跡が残っている。ここで休んだ八百比丘尼が再び来るときの記念に付けたものという。		西頸城郡の伝説
49	新潟県長岡市野積	弥彦明神が野積浜にいた頃、高津家（金五郎）が招かれ人魚をご馳走されるが食べずに家に持ち帰ったところ、娘が食べて八百歳の長寿を保つ。比丘尼になり、天文年代に若狭小浜の空印寺境内で入定した。高津家には尼の遺物の古絵図がある。また家の前には手植えの松があり、この松が生きている限り自分も生きていると言い残して旅に出た。	◎	佐渡の昔の話
50	新潟県佐渡市羽茂大石	羽茂大石の田屋家の主が、神明講で知り合った老人宅に招かれ、人魚の肉を持ち帰る。それを食べた娘が長寿となり、比丘尼になって全国を行脚する。何百年か後、故郷に帰ってきた比丘尼が村の昔の歴史（粛慎の隈）を語った。再び旅に出た比丘尼は小浜空印寺で入定する。	◎	佐渡国誌 古志路第二〇九号 佐渡の昔のはなし 伝承文藝第十八号
51	新潟県佐渡市羽茂大橋	田屋の八百比丘尼が、この松が枯れたら自分が死んだと思ってくれと言い残し、松を植えた。		佐渡の伝説
52	富山県富山市	八百比丘尼の植えた杉が尼杉と呼ばれている。		若狭国志伴信友書入
53	富山県黒部市園家	善称寺の裏の池は竜宮に通じるとされ、寺に来た客の接待をした上清どんの爺さんが、人魚の肉が入った折り詰めを持ち帰ったところ、これを食べたお虎婆さんが長生きをした。園家千軒に大津波が来た際、このお虎婆さんが警告したが、町の者は信じず、町は全滅し、一人生き残ったお虎婆さんは旅に出て、若狭で八百歳まで生きる。村の人が若狭に訪れた際に、村の椿の花が落ちたときは自分が死んだと思ってくれと言い残す。末裔が園家の山滝清一といい村では上清どんと呼んでいる。	◎	越中志徴 とやま民俗二〇
54	富山県黒部市玉椿	昔、玉椿千軒という湊があり、村長が旅で知り合った古狐から振る舞われた人魚の肉を娘が食べ、八百歳まで生き八百比丘尼と呼ばれた。		越中志徴八 伝説とやま
55	富山県中新川郡立山町下田	四郎兵衛が講で行った家から、人魚の肉の入った折り詰めを持ち帰り、娘が食べ何百年も生きたため、白比丘尼と呼ばれる。村から旅立つときに白山社に一本杉を植えた。白比丘尼は若狭で八百比丘尼となったと言われる。	◎	五百石地方郷土史要
56	富山県中新川郡立山町立山	若狭小浜の女僧、止宇呂尼が供を従え女人禁制の結界に入ったところ、杉と化し美女杉と呼ばれる。また石になったとも言われ、姥石と言われる。	◎	和漢三才図絵
57	富山県中新川郡立山町栃津	八百比丘尼が米山の岩屋に居住したと伝わる。		上市町史

58	富山県中新川郡上市町若杉	孝徳天皇の時代、若狭の姫が白子であったので尼になった。龍神より不老不死の薬をもらい、八百歳まで生き、八百比丘尼と呼ばれる。若杉に来た際に杉箸を地面に差し、これが大樹になって枯れたら自分も死ぬと言い残した。	◎	上市町史
59	富山県黒部市	黒部の麓の村に碁を打ちに来る老人がいた。この老人が村の人を自宅へ招待し、滝の中にある老人の家で歓待を受けた村人は人魚の肉を持たされ、家に帰ると三年が経っていた。人魚の肉を持ち帰った一人の娘がそれを食べ、三百歳まで生きた。		越中伝説集
60	石川県輪島市河井町　重蔵神社	輪島市縄又町出身の八百比丘尼が植えた杉は比丘尼杉と呼ばれている。		能登国名跡志
61	石川県輪島市縄又町	谷左右衛門が狢の頼母子講に行き、海人魚や海人貝をお土産にもらい、娘が食べ不老不死となる。一度村を出て再び帰ってきたときには知る人もいず、尼となり白比丘尼と呼ばれる。全国を行脚して植樹を行い、一度故郷に戻るが最後には若狭小浜で洞穴に入り、入定した。洞穴に入るときに、椿を植え、これが枯れたら自分が死んだと思ってくれと言い残す。八百年生きたので八百比丘尼と呼ばれた。八百比丘尼が村を出るとき秀の木は切るなと言い残したが、村人が言いつけを守らず切ってしまったために縄又は地滑りがひどくなった。八百比丘尼は金の鶏を飼っていたとも言う。	◎	能登志微 輪島の民話一
62	石川県輪島市美谷町	白比丘尼が植えたという松がある。		加賀能登の伝説三
63	石川県輪島市大沢町	縄又で生まれた白比丘尼が浜辺で天候を見ていて、七日先まで天気がわかったという。		輪島の民話二
64	石川県珠洲市宝立町春日野	若狭の八百比丘尼が植えたので比丘尼杉と呼ばれている。	◎	珠洲郡誌 加賀能登の伝説
65	石川県珠洲市上戸町寺社光照寺	若狭の八百比丘尼が植えた杉は一本杉と呼ばれている。杉箸から根付いたので、逆さ杉とも呼ばれる。光照寺はもと談議所と呼ばれ、談議兵右衛門の娘が白比丘尼と言われる。	◎	能登名跡志 老の路種　三 能登遊記　下 加賀能登の伝説
66	石川県珠洲市高屋町	八百比丘尼の植えた椿が千本椿と呼ばれている。		若狭国志伴信友書入
67	石川県白山市白山	八百比丘尼の植えた杉が尼杉と呼ばれている。		若狭国志伴信友書入
68	石川県羽咋郡志賀町富来	輪島市縄又町出身の八百比丘尼が植えた椿が椿原と呼ばれている。		能登国名跡志
69	石川県鹿島郡中島町	八百比丘尼の植えた杉が熊甲の杉と呼ばれている。		加能民俗四
70	石川県輪島市門前町浦上	輪島市縄又町出身の八百比丘尼が門前町浦上の若狭という集落に住んだ。		能登志微 加賀能登の伝説
71	石川県鳳珠郡穴水町前波	輪島市縄又町出身の八百比丘尼が植えた槻は一本木と呼ばれている。槻木に榎の実がなる。		能登志微 能登国名跡志
72	石川県鳳珠郡穴水町沖波	輪島市縄又町出身の八百比丘尼が植えた椎は椎木原と呼ばれている。		能登国名跡志 能登志微　八
73	石川県鳳珠郡穴水町藤波	八百比丘尼が植えた杉がある。		能登日記
74	石川県鳳珠郡能登町神和住	丑屋地の左衛門太郎家の主が頼母子講から持ち帰った料理を娘が食べ、長寿、怪力となり、白比丘尼となった。若狭の短命集落に請われて嫁に行き、その集落は長命集落となる。左衛門太郎家には白比丘尼の墓がある。	◎	柳田村の集落誌
75	福井県小浜市小浜男山　空印寺	八百比丘尼が入定したという洞窟があり、白椿を持った八百比丘尼の像が祀られている。	◎	若狭国志 若耶郡談 捨椎雑話
76	福井県小浜市青井　神明社	八百姫明神として像が祀られている。白玉椿を植えたとされる。	◎	若狭之守護代之年数並旧記 若狭国志 捨椎雑話 梅の塵
77	福井県小浜市小松原	白比丘尼は小松原の生まれで、父の釣った怪奇なる魚（人魚）を娘が食べ、八百歳まで生きたため、八百比丘尼と呼ばれる。肌が白かったため、白比丘尼と呼ばれた。	◎	若狭国志 若耶郡談
78	福井県小浜市東勢	髙橋長者が、竜宮城の人の招きによりもてなしを受け、人魚の肉を持ち帰るが、娘が食べて数百年経っても老いなかった。そのため八百比丘尼と呼ばれた。	◎	八百比丘尼略縁起 捨椎雑話
79	福井県小浜市下根来	若狭遠敷郡根来鵜瀬川に道満という者がおり、山中で異人と会い、奇菌を貰い、それを持ち帰ったところ娘が食べて長生きとなった。	◎	若狭守護代記 捨椎雑話
80	福井県小浜市堅海	八百比丘尼の住んだところが比丘尼岩と呼ばれる。	◎	捨椎雑話
81	福井県小浜市下田	昔、漁師の娘が人魚を食べ八百年も生きた。空印寺の岩穴へ入定する際に、椿を一本植え、この椿が枯れたら死んだと思ったと言い残す。岩穴は京都へ続いていると言われる。	◎	若狭の昔話
82	福井県小浜市	諸国行脚の六部が佐渡羽茂の羽茂長者に宿を借り、不思議な石塊を長者に見せたところ、長者は自分の宝との交換を申し出るが六部は断り、代わりに不老長寿の霊肉を差し出す。翌日長者が六部を討ち取って石塊を手に入れようとするが失敗する。不老長寿の霊肉は、長者に使える老僕が家に持ち帰る。六部の石塊から出てきた少女も老僕の家に住み始めるが、少女は霊肉を食べ不老長寿となる。少女は千年の寿命を若狭の殿様に譲り、八百歳で生涯を終え、八百姫大明神として祀られた。	◎	福井県の伝説
83	福井県小浜市	八百比丘尼が橋の上で滑って転んだのがもとで、ついに寿命を終えたことから、その橋をころび橋という。	◎	若狭の伝説
84	福井県今立郡池田町水海	八百比丘尼の植えた椿がある。		旧上池田村の民俗

85	福井県三方郡美浜町　興道寺	八百姫は小浜で生まれたとされている。	◎	八百姫宮略縁起
86	福井県三方上中郡若狭町堤	八百比丘尼が竿を掛け、着物を干したという櫛の木がある。		野木村誌
87	福井県三方上中郡若狭町杉山	八百比丘尼に由来する冠石がある。		上中町郷土史
88	福井県大飯郡おおい町納田終	八百比丘尼が越えた峠を尼来峠という。		越前若狭の伝説
89	山梨県大月市賑岡	八百比丘尼が居住した比丘尼屋敷と葬った孝阿塚がある。		北都留郡誌
90	長野県長野市小田切　観音堂	八百比丘尼が居住した観音堂と植樹した櫟がある。		信州の伝説
91	長野県長野市　戸隠中社	八百比丘尼が植樹した杉は比丘杉と呼ばれている。		信州の伝説
92	岐阜県高山市漆垣内村　二宮神社	二宮神社に八百比丘尼が来訪した。大欅を植えたとも伝わる。		岐阜県の伝説
93	岐阜県高山市山口町　美女峠	八百比丘尼が居住した比丘尼屋敷がある。		飛騨の伝説
94	岐阜県各務原市三柿野	三柿野にアサキ長者がいたが、娘を残して皆死没し、毎日池の魚に飯粒を施したため、功徳により八百歳の長寿を授かった。後年、若狭にて没す。	◎	美濃国稲葉郡志
95	岐阜県羽島郡岐南町印食	与四郎という漁師が竜宮城から人魚の肉を貰い、それを娘が食べ長生きとなる。大洪水から一人助かり、若狭で比丘尼として暮らす。	◎	尾濃葉栗見聞集
96	岐阜県養老郡養老町明徳船着神社	八百比丘尼が来訪した際に船を繋いだ岩が船繋ぎ岩と呼ばれる。		養老郡志
97	岐阜県養老郡養老町勢至	若狭の八百比丘尼が大岩を山頂まで運ぼうと背負っていたが、琵琶湖が見えたため気がゆるみ、ここに置いていった。	◎	養老町史通史下
98	岐阜県関市高賀山	八百比丘尼が来訪した岩屋がある。		洞戸村誌
99	岐阜県関市杉原	八百比丘尼が入定したといわれ、植えた大杉がある。		岐阜県の伝説
100	岐阜県郡上市八幡町	八百比丘尼が植樹した杉は尼杉と呼ばれている。また逆杉といって杉葉はさかさまであった。熊野に行く比丘尼の杖が根付いたもの。		若狭国誌伴友信書入 郡上八幡町史 石徹白村郡騒実録
101	岐阜県郡上市八幡町鬼谷郡	那比新宮の南側に比丘尼岩といって、小さな石から育って岩となった。比丘尼が腰巻きをこの岩に掛けたところ、岩は二つに割れて成長が止まった。		郡上八幡町史
102	岐阜県郡上市八幡町亀尾島	八百比丘尼が衣を干した岩がある。		郡上むかしむかし
103	岐阜県郡上市美並町杉原	熊野神社縁起に小石が年を経るに従い大きくなり、仏体に似た巨大な石となったが、この石は熊野から比丘尼が袋に入れて持ってきた。		郡上むかしむかし
104	岐阜県加茂郡八百津町黒瀬	黒瀬に比丘尼塚があり、塚には樹齢五百年以上の椋の大木がある。		八百津町史
105	岐阜県恵那市山岡町下手向	応領寺という尼寺に二百歳の比丘尼がいた。		恵那郡史
106	岐阜県益田郡萩原町花池	八百比丘尼が住んだと言われる。また平岩に宝を埋めた。		岐阜県益田郡誌
107	岐阜県下呂市中切	治郎兵衛という酒屋が竜宮からききみみを貰ってきたが、娘が中の人魚を食べてしまい、八百歳まで諸国を巡った。		岐阜県益田郡誌
108	岐阜県吉城郡神岡町尊麻生野	八百比丘尼が住んだと言われる。		飛弾遺乗合府
109	岐阜県吉城郡神岡町堀之内白山神社	八百比丘尼が植えた杉がある。		袖川村誌
110	岐阜県高山市国府町宇津江	比丘尼がここで殺されて、葬ったところが比丘尼塚である。		飛弾の史話と伝説
111	岐阜県高山市在家　桂本神社	八百比丘尼が植えた杉がある。		飛弾遺乗合府
112	岐阜県高山市蔵柱　白山神社	八百比丘尼が植えた杉がある。		ひだびと四－一二
113	静岡県沼津市出口町　乗運寺	乗運寺で八百姫明神として祀っている。		駿河志料
114	静岡県島田市岡田　医王寺	八百比丘尼が住んだと伝えられる。縁の井戸がある。		座側雑記
115	静岡県賀茂郡東伊豆町稲取	八百比丘尼供養の石像がある。		古代研究
116	愛知県一宮市浜町	八百比丘尼は神明津町豊島某家に生まれたが、故あって人魚を食い、百歳になっても老いないので剃髪して金光寺を創建し、諸国を遍歴して若狭で没した。	◎	愛知伝説集 一宮市史下
117	愛知県一宮市浅井町尾関小塞神社	別名船着明神ともいい、黒岩の某氏が若狭の八百比丘尼に参詣した折、八百比丘尼が尾張愛知県尾関の出身で、昔は若狭から尾関に船が着けたが、百年に一里づつ埋まって、今では宮のボタという所に船が着くと話を聞いた。祭文殿付近で足踏みするとドンドンと音がし、八百比丘尼の生きていた当時の船が埋まっているという。	◎	愛知伝説集 一宮市浅井町史
118	愛知県春日井市白山町　円福寺	円福寺には、八百比丘尼の木像がある。漁師が人魚を捕まえて、庚申際の供え物にするが、漁師の娘が食べてしまい、八百歳まで生きる。世を儚んで横穴に入定する。横穴は若狭まで通じているという。	◎	愛知のむかし話 春日井のむかし話
119	愛知県常滑市前山　諏訪神社	継子の娘が庄屋の祝い事で人魚の肉を食べ、八百歳まで生きる。八百姫明神として祀られる。		愛知のむかし話
120	愛知県犬山市五郎丸	昔ここに八百比丘尼が住んでいた。尾張富士祭神の木花咲耶姫が夢枕にたち、山の峰に小石を上げて背を高くして欲しいとの願いを村人に伝えて感謝される。入定した場所に生えてる椿はお化け椿と呼ばれている。位牌は五郎丸の庚申堂にあった。		愛知伝説集

121	愛知県知多市南粕谷　大智院	八百比丘尼が植えた樟がある。当時はここまで海になっており、この木に船を繋いだとも伝わる。		愛知伝説集
122	愛知県知多郡南知多町内海	八百比丘尼は当地で生まれたと伝わる。		日本の民俗愛知
123	三重県松坂市佐久米町	八百比丘尼が住んだと言われる。また黄金を埋めてあるところが八百比丘尼塚と呼ばれる。		三重の金鶏伝説地
124	三重県鈴鹿市白子	八百比丘尼は鈴鹿市白子の出身と伝わる。		能登国名跡志
125	三重県鈴鹿市平野町	若狭から伊勢参拝に来た八百歳の比丘尼がここで亡くなった。比丘尼塚という八百比丘尼葬地の塚がある。	◎	勢陽五鈴遺響 神戸平原地方郷土史 伊勢奇談　明烏上巻
126	三重県伊勢市山田	八百比丘尼が世を儚み身投げした池を比丘尼池という。		宮川夜話草
127	三重県いなべ市藤原町市場山神社	市場には若狭の白比丘という仙術を使う巫女が住んでいた。	◎	員弁史談補
128	三重県いなべ市藤原町細野東禅寺	細野には若狭の白比丘という仙術を使う巫女が住んでいた。古井戸が残っている。	◎	員弁史談補
129	三重県亀山市関　宝蔵寺	白比丘尼が安産祈願の宝蔵寺の額を背負いて仏前に掛けた。		伊勢参宮名所図絵 勢州関本尊地蔵菩薩縁起
130	三重県安芸郡安濃町草生	草生の浄明寺跡は八百比丘尼の亡くなった場所で、その時に朝日さすこの木の元に金の鶏と縄を埋めたと言い残した。産湯が谷でで生まれたとも伝えられ、成長して若狭に行ってからも、草生周辺が海だった頃船で帰ってきたので、船山という地名がある。またこの船を九艘埋めたところが九艘塚という地名で残っている。	◎	勢陽五鈴遺響 三重の金鶏伝説地
131	京都府宮津市上世屋	八百比丘尼が入定した地と伝わる。		世屋の昔話
132	京都府南丹市日吉町海老坂地蔵堂	八百比丘尼が地蔵堂を作ったと伝わる。		空印寺文書
133	京都府京丹後市乗原	大久保氏の娘が人魚の肉を食べ八百歳まで生き八百比丘尼と呼ばれる。街道に石を敷いて松の木を植えたので庚申塚に祀られて徳をたたえた。		竹野郡誌
134	兵庫県神崎郡神河町寺前	八百比丘尼が世を儚み身投げした地と伝わる。		播陽俚翁説
135	和歌山県紀の川市貴志川町丸栖	丸栖村に高橋某という家があり、異人に庚申講の招待を受け、土産として人魚を貰ってきたところ、娘が食べて長命となる。数百年後に若狭の尼寺に居住し、入定した。	◎	紀伊続風土記 貴志の谷昔話集
136	和歌山県日高郡川辺町若野	諸国を巡る八百比丘尼が若野村に来た際に、洪水が起こっており、二百年で三回もこの地で洪水を見たと言い残した。		紀伊日高民話伝説集
137	鳥取県鳥取市正蓮寺　面影山	面影山に老婦が住んでおり、大路山麓の鼠の窟でもてなしを受け、人魚の肉を貰い娘が食べたため、長寿となり八百比丘尼と呼ばれる。		因幡誌
138	鳥取県鳥取市卯垣	爵山城主が川狩りの際に人魚を捕らえ食べるが、女子一人残り長寿を保ち、諸国を遍歴する。八百比丘尼と呼ばれる。		因幡誌
139	鳥取県米子市粟島	粟島の庄屋の主人が竜宮講に招かれ人魚の肉を持ち帰る。それを食べた娘は八百歳まで生きたが、世を儚み粟島神社の洞窟で入定した。八百ベクサンという。		鳥取県郷土調査四八・五一　伝承三
140	鳥取県倉吉市別所	穴田というところで、八百姫という美人がいて、人魚の肉を食べて長生きをし、若狭に行った。	◎	日本伝説大系一一稲田和子稿本
141	鳥取県鳥取市鹿野町鹿野	志加奴神社の奥に岩屋があり、八百比丘尼の岩屋と言われている。河内川の人魚を食べて長寿を保った川漁師の後家さんがこの中に八百年も住んだ。		因幡伝説民話四
142	島根県浜田市	八百比丘尼が植えた杉がある。尼杉と呼ばれる。		若狭国誌伴友信書入
143	島根県浜田市国分町	唐鐘のアイチという豪家の男が、海岸を歩いていると亀に導かれて竜宮城でもてなしを受けた。帰る際に人魚の肉を誤って持って帰り、娘が食べてしまい千年の寿命を保ったため千年比丘尼と呼ばれた。怪力の持ち主で、巨大な石を運んだり投げたりした。下府片山の山腹に千年比丘尼の住んだと言われる石室（古墳）がある。		那賀郡史
144	島根県益田市越峠	越峠に八百比丘尼の墓がある。吉田村の住人某女が人魚を食べて八百歳の命を保ち、全国を遊行し休息した場所といって、ここに碑を建てた。		高津町史
145	島根県安来市安来町　洞正院	八百比丘尼の作った地蔵が安置されている。		安来郷土誌
146	島根県江津市都野津町	唐鐘の料理人が、魚の肩を海に捨てていると、亀に導かれて竜宮城でもてなしを受けた。帰る際に人魚の肉を誤って持って帰り、娘が食べてしまい千年の寿命を保ったため千年比丘尼と呼ばれた。若狭で入定したが、線香を持って穴に入り、線香の煙が出ているうちは生きていると言い残す。都野津に来た際に朝日さし、夕日のあたるところに黄金千両のものが埋めてあると言ったとも伝えられる。	◎	江津のむかしのはなし
147	島根県那賀郡三隈町大麻山	ある比丘尼が大麻山に登山して、三本の松を一つに纏め、この松は千年後に枯れ始める、枯れたら自分が死んだと思ってくれと言い残す。		西石見の民俗
148	島根県那賀郡金城町	天頂畷に千年比丘尼が来て槇を植えた。		西石見の民俗
149	島根県鹿足郡吉賀町柿木村下須	千年比丘尼が柿木村を開拓し、ここで没したので墓もある。		柿木村の民俗
150	島根県隠岐郡隠岐の島町下西　玉若酢神社	八百比丘尼が植えた杉がある。		隠岐島の伝説
151	島根県隠岐郡隠岐の島町岬町　蛭子神社	八百比丘尼が植えた杉がある。		隠岐島の伝説

152	島根県隠岐郡隠岐の島町岬町	八百比丘尼が植えた杉がある。		隠岐島の伝説
153	島根県隠岐郡隠岐の島町南方	柿本人麻呂の息子、躬都良が隠岐に配流され、五箇村南方の豪族比等那の娘と恋に落ちたが病死する。躬都良の遺骨を大和に届けるために娘は隠岐を出たが、小浜で隠岐行きの船を待つ内、小浜に残り、八百比丘尼となり小浜で一生を終えた。郡川の畔に姫を祀る八百姫社がある。	◎	隠岐島の伝説
154	島根県隠岐郡隠岐の島町釜屋	五箇村の八百尼が都万村屋那に来て、一夜で松を植えるつもりが、鶏の鳴き真似をした男のせいで中断してしまう。投げ捨てた松が根付いて一帯が松林となる。		島根県口碑伝説集
155	岡山県倉敷市亀山	八百比丘尼はこの地で生まれ、坊山に居住した。植えた椿は比丘尼椿と呼ばれる。		玉島変遷史
156	岡山県浅口市金光町津熊	金光町津熊の辺りは昔海で、漁師が人魚が獲れたと人々に振る舞ったところ、そのうちの一人が家にもつて帰り、娘が食べてしまった。長寿となった娘は、比丘尼となって全国を回っていたが、長野善光寺で同郷の者と話をした。		なんと昔があったげな下
157	岡山県勝田郡奈義町	薬屋が山の中で迷い、山中の女の家に泊めて貰う。この女は漁師の女房で大病を患ったときに夫が獲ってきた見慣れない貝を食べ全快したが、いつまで経っても歳を取らなくなった。娘の頃に後醍醐天皇が隠岐に流されたことを覚えているという。		なぎの昔話
158	広島県福山市神辺町中条	中条に佐貫坊という修行者がいて、信州の山中で宿を求めると老婆は同郷だと答える。老婆は中条が昔海だった頃の記憶しかなかった。老婆は漁師が獲った人魚を食べて長生きし、子孫も絶えてしまったので、中条を出たとのこと。		備後の伝説上
159	香川県三豊市高瀬町下勝間	八百比丘尼が塔を建てた。		西讃府志
160	高知県須崎市多ノ郷大坊賀茂神社	昔、須崎に大坊千軒という繁栄する浦があったが、人魚を獲った漁師が国主に献上せず、分け合って食べたため皆殺しとなり、一人生き残った娘が若狭に行き八百年生きた。土佐に帰ってきた際に大津波で大坊千軒は跡形もなくなったため、その近くに石塔を建てた。	◎	南路志 皆山集 多ノ郷村誌
161	高知県香南市香我美町岸本	八百比丘尼が来訪した遺跡として、上人塚がある。		南路志
162	福岡県北九州市若松区乙丸貴船神社	庄浦の女が子供に勧められて大きな貝を食べたら歳を取らなくなってしまう。		野翁物語 兼霞堂雑録 諸家随筆集
163	福岡県みやま市瀬高町本吉	唐人の竹本翁の娘が小螺貝を食べることによって、二〇数人の夫を持った。		邪馬台国探見記
164	佐賀県鹿島市本城	鹿島市本城の農民の娘が、父の庚申講の土産である人魚の肉を食べ、八百歳の寿命を保った。浄土山に住んだので、比丘尼谷と呼ばれる。		豊後筑紫路の伝説

表 2　八百比丘尼伝説文献年表

No.	和暦 西暦	文献	事項	概要	備考
1	宝徳元年 1449	『中原康富記』五月二十六日の条	或説云、此廿日比、自若狭国、白比丘尼トテ、二百余歳ノ比丘尼令上洛、諸人成奇異之恩、仍守護召上歟、於二条東洞院北頬大地蔵堂、結鼠戸、人別取料足被一見云々、古老云、往年所聞く之白比丘尼也云々、白髪之間白比丘尼ト号歟云々、官務行向見之云々、而不可然之由巷説之間、今日下向若狭国云々	宝徳元年（1449）年夏の同時期に書かれた日記である。比丘尼の年齢は No.1 が 200 余歳とするのに対し、No.2、3 が 800 歳とする。各日記の共通点は、長寿の比丘尼が若狭より上洛して来ているという点。各日記の比丘尼の帰国時期が異なるのは、長寿比丘尼を称するいくつかの集団があったことをうかがわせる。見料を取っていたことから、一種の勧進活動であったろう。No.1 の古老の話から、この日記以前から白比丘尼と称する長寿の比丘尼の噂があったものと考えられる。No.3 からは、白比丘尼と同様に長寿を語る人物が複数存在したことが見て取れる。	神明宮創建 1400 年頃
2	宝徳元年 1449	『唐橋綱光卿記』六月八日の条	白比丘尼御所に参る云々、年八百歳の由申す、怪異の事也、今日国に帰る云々、定めて篇解の物か云々、不吉の事也、不審の沙汰条々ある者也、言ふ莫れ莫れ		
3	宝徳元年 1449	『臥雲日件録』抜尤七月二十六日の条	近時八百歳老尼、自若州入洛、洛中争覩、堅閉所居門戸、不使容易看、故貴者出百銭、賤者出十銭、不然即不得入門也、曹源曰、昔時青岩寺側有七百歳僧、入城乞食、所謂雖魚肉皆掛干錫頭持来食之、		
4	天正年間 1590 頃	林羅山『本朝神社考』巻六　都良香の条	余が先考嘗て語つて曰く、伝へ聞く、若狭国に白比丘尼と号する者あり。其の父一旦山に入り異人に遇ふ。与に倶に一處に到る。殆ど一天地にして別世界なり。其の人一物を与へて曰く、是れ人魚なり。之を食ふときは年を延べ老ひずと。父携えて家に帰る。其の女子迎へ歓んで衣帯を取る。因て人魚を袖に得て、乃ち之を食ふ。女子寿四百余歳、所謂白比丘尼是れなり。余幼齢にしてこの事を聞いて忘れず	林羅山の幼少期の頃に聞いた話として、1590 年頃の話と考えられる。No.1 ～ 3 の頃から約 150 年経っているが、白比丘尼の長寿の理由がストーリーとして始めて述べられている。	

5	寛文年間1661～1673	桜井曲全子『若狭国伝記』 寛文年間に成立したと推定されている「若狭国伝記」は若狭の郡境・国高・名所・土産名物・国主略譜・沿革・社寺・山川・名所等からなり、若狭に関する江戸時代最初の地誌である。	八百比丘尼ノ窟「此窟空印寺ニアリ、伝テ云、往昔小浜ノ人十人計登舟泛江流、忽起風浪飄飄漂空江、失度方不進退、不意一島ニ著ク、上テ見レハ金ノ樓門アリ、サレハ人アリト思ヒ、扣玉扉、内ヨリ衣冠ノ宮人出テ答フ、渠等尓々由ヲ語テ求食、宮人入テ主人ニ告、主人招客進席、其家内ノ粧観甃玉瓦金、既而饗膳出、屠人如人肉ナル物ヲ調シテ進之、僉甚恐テ不食、漸定風浪、乗舟旧里帰、一人彼肉ヲ袖ニシテ女子アリ、喰此肉而后無病長寿ニシテ、保八百歳、故時人号八百比丘尼、衆皆謂、其島ハ蓬莱島、肉ハ人魚ナノヘシト、或人云、日本ニ七仙女アリ、此比丘尼其一ナリ、死所不詳、云々、（下略）」	この文献で始めて800歳の長寿の比丘尼としての「八百比丘尼」という名称が使われている。八百比丘尼が住んだ洞窟「八百比丘尼ノ窟」が空印寺にあるとする。死所不詳でありこの洞窟は八百比丘尼の死所ではない。	1662年小浜藩主酒井忠勝の号にちなみ「空印寺」と寺号を改める。
6	元禄2年1689	貝原益軒『己巳紀行』	「八百比丘尼の事。世俗の語り伝へに云く。古へ此辺に六人の福徳長者あり。時々参会して宝物を競べ争ふ。食膳も又珍奇を盡す。或時人魚を料理す。五人の者は人魚を知らず。怪しき物とて食はず。其中の一人。人魚の肉五六片これを懐にして家に帰り。妻子に見せて捨てんと思ひ隠し置けるを。一人の女子。人魚は薬なる由を聞て。窃かに取て食しける。是より長命にて。八百年生きて，此所に住せし」	貝原益軒が小浜に滞在した際に聞いた話であり、現地で実際に伝承されていたストーリーであると思われる。	
7	元禄6年1693	牧田忠左衛門近俊『若狭郡県志』	八百比丘尼洞「在後瀬山下空印寺之境傳言、八百比丘尼隠此厳洞矣、八百比丘尼或称白比丘尼、向若録曰、白比丘尼之名昭著于前世其所臥息之洞在後瀬山西麓空印寺内穿巨厳方丈許上郭下穏云々」	八百比丘尼洞として、八百比丘尼の隠れた場所（死所）とする初めての記述。	
8	正徳2年1712	『和漢三才図会』	「若狭小浜の空印寺に 八百比丘尼の木像あり。この尼、むかし当寺に住み、八百歳なりしも、美貌十五、六歳ばかりなりし。これ人魚を食いしに因る」	神明社と空印寺を混同か。	
9	1700年代半ば	『若狭国守護代記』 若狭の最初の守護ともいえる稲葉時貞から、宝暦十三年に小浜藩主となった酒井忠貫までの若狭歴代の守護・大名・藩主をあげ、その事歴を年譜風に著したものであるが、著者については不明。	巻二「明徳元年（一三九〇）午、今年世に聞こえある若狭の白比丘尼、小浜の西、青井白玉椿の辺の小庵にて死すという説あり。この比丘尼は昔、雄略天皇の御宇、若狭遠敷郡根来鵜瀬川の辺に出生して、今年に至て寿一千年に及ぶなり。この比丘尼無病長寿にして我が年をいわず。依て世の人その寿命を知らず、既に八百歳に至る時、われは八百歳と謂い出しけるより、世人八百比丘尼と号す。父は若狭の道満といひし者なりといい伝えたり。道満は根来鵜の瀬川の辺に住ける者なりと云々。道満の住し屋敷とて今にその跡ありという」 巻五「元和五年（一六一九）未、今年小浜の西、青井白玉椿に小社をはじめて建立す。是れ即ち同所神明の神主菊地某が計ひなり。是は、去る頃より比丘尼の形を現して舞遊び、人にゆきあいては、かき消すように失ぬ。この所は昔、八百比丘尼の住跡なれば定めてその霊魂にてあるべしとて小社を建て、八百比丘尼の宮と名付く。それより怪しきものは夜も出ずという。今は歯痛の宮と世人申して、歯の痛むに願を掛れば、癒と云々」	巻二では、八百比丘尼の生家を道満とし、雄略天皇の時代、若狭遠敷郡根来鵜瀬川に生まれとする。文献で始めて八百比丘尼の生家について記述されている。死没年についてもふれられており、明徳元年（1390）とする。No.1～3の現実の白比丘尼が活躍したとする記述と矛盾が生じている。巻五では、明徳元年に死んだ比丘尼の霊を慰めるため、元和5年に神明社神主である菊池氏が八百比丘尼の小社を建立した。この後、同所での比丘尼の霊は現れず、歯の神様として敬われている。	
10	宝暦3年1753	若州小浜神明宮主菊池肥後守橘朝臣「八百比丘尼縁起」慈眼寺所蔵 埼玉県さいたま市大宮の慈眼寺に現存。	当神明宮末社八百姫の濫觴を訪ぬるに、人王四十二代文武天皇御宇に、当国に秦の通鴻といふ人有、或時友にいざなはれ海辺に至る。友いはく少し目をとじ給へと。諾してとず。目をひらけば高委百丈の金閣なり。世に見ざる処の荘厳なり。各礼儀をわりて饗応甚珍膳なり、主じ膾板を取よ、是魚此所にも稀なる物成。何とふ是をすすめん為に招けり。是を食ふもの長生不死なりと。見るに七八歳の人なり。是をあぶりあとふ。道満是人間成事を怪しみ、くらはずして懐にす。饗応をわりて暇を乞ふ。忽にもとの河辺也。此時是海宮成事を知れり。家に帰り甚酔臥す。時に女子一人有。いつも他へ行帰ればみやげを乞ふ。父臥す枕もとに鼻紙有。ひらけば一物あり。女子食ふ。父醒て尋ぬるに我くらへりという。父のいはく汝長生すべし是竜宮の珍物也。或は云、父山に入る。異人に逢う。ともに一所に行別世界、一もつをあとふ。父はくはずして懐に入帰る。女子是を食ふ。又一説に白比丘尼は若狭国小松原の人なり。父有時つりをたる。人魚の形を得たり。是異物成とすつ。女子ひろひ食ふと。復一説に若狭国三方郡興道寺村の人、父は天仙と成りて、白椿山のふもとに住と。説々多いえども我が家の伝と異り、女子年を経といへとも常に二十斗のごとし。容顔美麗面背甚白し。世にたぐひなし。人挙りて婚姻を望めども嫁せず、花鳥使日々に到る。此事を厭い自ら除髪して尼となる。其より国々を巡行し、霊仏霊社を拝し、或は破壊の社有は是を修造し、或は仏を再興し、道路あしき処には橋をかけ、水なきところには水をさぐり、木なき処には木を植ゑ、其基跡甚多し。世に若狭の白びくにといへり。何の名といふ事をしらず。ここに後瀬之山つづき、南西の翠微に、天照皇大神・豊受皇大神の社有。尼此処に柴の庵を結び、朝夕に齋奉りしに曰く、此間幾百年といふ事をしらず。長生の人と聞及ぶに任尋来拝するもの多し。		神明宮縁起作成1740年

10	宝暦3年1753		年いくつとへば文武天皇の御時生しと答ふ。容貌を見れば二十斗に見ゆ。長生の道をとへば、七情をはなれ、人のましはりをやめといふ。其後吾影をのこし、何国に死去といふ事をしらず。或説にいふ。小浜町の橋にてころびしゆへに、いまに薨橋といふ。別此橋の石、丹波の国より自負来といふ。其石城中に有之也。其日又武田の城中の岩穴に死すと。人□□りて尋ぬるに尼を見るものなし。此岩穴小浜空印寺に有之。然者天上するか地に行か兪に存在するの委曲知がたく、世に八百比丘尼といふは、去りし時分と生まれし時分とを考えて八百年余になれば、八百比丘尼といふ也、家に伝る処、あらあら是をしるし、己下寿命神にて都鄙遠近之人々今に歩をはこぶ事綿々たり。	神明社神主菊地氏名による縁起であり、神明宮で作成された縁起の全貌を知ることが出来る。縁起自体は、地誌等文献から寄せ集めた八百比丘尼伝承を一纏めにして作り上げられた体裁。なお、慈眼寺と神明宮との直接的な関係はなく、なぜ縁起が慈眼寺に残されているかは不明。	
11	明和元年1764	木崎外字窓『拾椎雑話』木崎外字窓が、宝暦七年（一七五七）から町内・領内を巡回して古老から聞取りするなどして、七年後に完成させたものである。	「岩窟」の項「八百比丘尼石塔の事は、五世良白和尚の夢に老尼来り、我菩提すくなし、頼よしを云、既に三度に及ふ。是によって初て比丘尼の墓を築、当今三界万霊の墓の所にあり、開山の墓と相並へリ。然る処廻国巡礼とも参詣し是を見て夫婦墓にて候やと尋問もの多し。此故に比丘尼の墓を岩窟へ引て今の如しと云。此墓寛文年中の事にして古跡にあらず」 「寺社」の項「（前略）寛文の頃より比丘尼の像を山上に仮殿をしつらひ収め置、白山の祠は今に残れり、古来より有所の像は八尺五分斗。元文五年に改め作るは壱尺四寸也。此時初て縁起を作る。宝暦九年京都にて開帳あり、比丘尼は僧形故社家是を忌て八百姫と称す」	岩窟の項では、空印寺和尚の霊夢に出てきた老尼の依頼により、八百比丘尼の墓を境内に立てたが、参詣者の誤解を招いたことから、墓を岩窟持って行った。この事は寛文年間中（1661～1673）であり、八百比丘尼の岩窟を墓とするのは古いことではないとする。寺社の項では、神明社の八百比丘尼像を寛文年間に借殿を作って納めたとする。古来よりあった像と、元文5年（1740）に新たに造った像があり、この時縁起を作り、宝暦9年（1759）に京都で開帳したとする。	
12	安永4年1775	高山彦九郎『旅日記』	天気吉。今日行者縁日なりとて土人参る。吾も至る。清水町より西南に出、三丁ばかりにして、一丁あまり登り、舞台かけ作り、ここに役行者あり。本社は神明なり。内宮外宮あり、左に八百比丘尼の木影、内宮外宮は二十五年に一度建替、その古宮へかの木影をおく、この山は後瀬の継なり。神主の家に宝物縁起を見る、文武帝の御代、秦道満海浜に至り不思議に金殿楼閣に至り人魚を得て、その子に食しむ。八百歳を保つといふ。是より下り白椿の森ここに昔八百比丘尼を安置すと、下りて大道のはたに舟とめ岩あり、昔此処へ九州の菊池氏舟をとめて居る。参宮の人を侍と俗説なり。是より此処に居、神明を勧請したりという	安永4年当時の神明宮付近の情景を描写。	1770年小浜藩、借財が11万両となり財政破綻寸前
13	寛政2年1790	百井塘雨『笈埃随筆』	万葉集に坂上大嬢贈家持云々、人者雖云、若狭道乃後瀬及山乃、後毛将会君。枕草紙に、山は三笠山、後瀬山、小倉山、是特其名を得て云々。此山の麓に八百比丘尼の洞有。空印寺といふ寺に又社有り。八百比丘尼の尊像は、常に戸帳をひらく。花の帽子を着し、手に玉と蓮華やうの物を持たる座像なり。又社家に重宝あり。比丘尼所持の鏡、正宗作の鉢太刀、駒角、天狗爪あり、比丘尼の父は秦道満といひし人のよし、縁起に見えたり。初は千代姫と云し。今は八百姫明神と崇む也。	空印寺内に八百比丘尼の社がある事になっており、八百比丘尼像は常に開帳されている状態。他に八百比丘尼関連の宝物がいくつか展示されている。	
14	年代不明現存本明治42年発行	空印寺「八百比丘尼略縁起」	そもそも八百比丘尼と申し奉るは、若狭の国祖荒砺の命の末流にして、当国勢村髙橋長者の姫御なり。人皇三十七代斉明天皇の御世白雉五年の御誕生にて、膚は白玉の如く容顔美麗にして智徳萬人に勝れさせ給う故に、世人崇めて神仏の再来となす。御齢十六歳の時龍王白髪の翁と現じ人魚の肉を与えらる、姫是を食し給うに不思議にや幾百歳を経給うも二八の容顔更に変わらせ給うことなし、百二十歳にして髪を剃り諸国を巡遊し、此処に五十年彼処に百年と止住せられ、所々堂社を修造し、又道路を開き橋梁を架け、五穀樹木の繁殖を教え、又尊皇奉仏五常の道をも授け給う、依って諸国御旧蹟の在る処は勿論尊崇せり。人皇百一代後花園天皇宝徳元年七月二十六日京都清水の定水庵にて化縁を止め、御生国なる若狭の国へ帰らせ給い、後瀬の山中に御神明とて尊き御社ありその傍りにいおりを結び住給いしが、御齢い八百歳にして当寺境内後瀬山麓の大巌くつへ入定為し給う、時人名づけて八百比丘尼または八百姫とも寿長の尼とも、又椿を特に愛し入定し給うゆえ玉椿の尼とも申し奉れり。御入定後祈願する者あれば必ず不思議の霊験あり、依って往昔より都鄙遠近老若男女この霊地に参詣し、福徳寿命を願い諸病平癒を祈り、その霊助を蒙る者が多きが為、五百十余年の昔より昔より今に至るまで参信祈願の絶ゆることなし。それ生まれながらに智徳萬人に勝る、これ聖なり、神なり、仏なり、八百歳の寿命を保つ、是素より凡人に非らず、霊験何ぞ疑わんや。薄福小徳の輩、宿業の為諸病医薬の効験なくば早く霊地に来り冥助を祈るべし。	成立年代は不明であるが、書物として現存するものは明治42年のものである。内容的に神明宮縁起と同じ時代に作成されたものと考えられる。	